



みどりの風

平成29年2月1日発行
校報 第538号
〔みどりの風 第81号〕
練馬区立関町北小学校

音楽との出会い - 関北森の音楽会 -

校長 大野 泰弘

今から20年ほど前の話です。11年間勤務した学校から練馬区に異動してきた私は、5年生41名の単学級を担任することになりました。当時の校長先生は、本校の第十代校長の松本勝士先生でした(松本校長先生との思い出は語り尽くせないほどあります)。その学校では、音楽には縁遠い私が、諸般の事情から子どもたちの吹奏楽部の顧問(といっても楽器指導はできないので、事務的な仕事担当でした)になったことを契機として、年に一度の地域主催の音楽祭にお父さん方のコーラスの一員として、「カルメン」・「アイダ」・「ダットン人の踊り」等を歌う舞台に参加させていただいたり、子どもたちにも出演の機会を初めて与えていただいたりと、いろいろな思い出ができました。中でも、NHK交響楽団の首席トランペッターの方やバイオリニストの大谷康子さんの演奏を間近で拝聴させていただいたり、欧州で活躍中の飯守泰次郎さんの指揮を拝見したりしたことは、クラシック音楽の専門家の方との初めての出会いでした。

当時の私がお世話になった方々は、現在はその音楽祭の企画運営には携わっていらっしゃいませんが、お父さん方やお母さん方のコーラスはその後も脈々と活動を継続していらっしゃいます。その活動の一つが、右のカレンダーの表紙になっている「榎音プロジェクト」です。この「榎音プロジェクト」は6年前の東日本大震災の直後、大きな被害を受けた大榎町の学校に楽器を寄付したり、音楽ホールの建設をめざしたりして、音楽を通して、被災地の子どもたちを励まし、勇気付け、音楽のすばらしさを共に語り続けていこうとする活動のことでです。

私は、昨年11月、ようやくこの「榎音プロジェクト」の音楽会に伺うことができました。今回は、大榎町の生徒さんも駆けつけ、一緒に演奏していました。こうして、音楽を通して、人の心と心の絆が深まり、生きる勇気や希望を得て、力強く前進していこうとする気持ちもたらされるのも、音楽との出会いがあるからであり、音楽がもっている力であるということも、生徒さんの演奏やコーラスの曲を拝聴しながら感じました。

本校でも、東日本大震災のあった翌年の関中ウインドアンサンブル部の皆さんの演奏会の折りに、関北ハーモニーマの皆様が、「TOHOKUの空へ」(作詞・作曲:山口タオ 編曲:佐怒賀悦子)という曲を熱唱されていましたが、その歌詞にある「一人ぼっちにならないで 一人ぼっちにしないから 遠くを心に想うこと ずっとずっと忘れない この場所から遠くへ歌おう 明日を吹く風になって 大空まで届くように 上を向いたあなたが見る その空まで届くように」という言葉は、同じ大空のもと、被災者の皆様と心をつなげて生きていこう、そういう思いを表しているように感じます。最近改めて知ったことですが、この「TOHOKUの空へ」という曲は、私がお世話になった音楽祭から生まれた曲なのだそうで、その曲を本校の関北ハーモニーマの皆様が選曲し紹介されたということは、音楽がとりもつ縁というか、音楽との出会いがこんなところにも広がっているのかと感心させられました。

ところで、本校では、今年度より隔年で、このような音楽のもつすばらしさを子どもたちが心深く感じ、生涯にわたって音楽を愛する心情を育むとともに、子どもたちの一年間の音楽の学習の成果を保護者や地域の皆様にもお聴きいただき、音楽を通して、豊かな時間と空間を共有していただきたいと考え、「音楽発表会」を開催することにしました。その名称については、子どもたちに公募し、この度「関北森の音楽会」となりました。前述の音楽祭が「小竹の森音楽祭」ですので、名称一つにも何かつながるものを感じました。

後ほどお届けするプログラムにも記しましたが、子どもたちはこれまでに音楽専科や担任の指導のもと、

作曲者の思いを受け止めながら、心を開いて、歌ったり演奏したりする楽しさを味わう。
お互いのよさを認め合い、全員で力を合わせて取り組むことの充実感や達成感を得る。
聴く人々に感動や喜びを伝えられるように、一つの音を大切に音楽を創り上げる。

といったことを心にとめて合唱や合奏に真摯に向き合ってきました。

「関北森の音楽会」当日は、多くのご来場の皆様に、深い感動と喜びをお届けできると存じます。今年度第1回目ということで、至らない点もあるかと存じますが、子どもたちの音楽には温かい励ましの言葉と拍手を送ってくださいますようお願いいたします。保護者、地域の皆様のおかげで、心よりお待ち申し上げます。

